

“学びをひろげる わたしと〇人の会” 第23回研究会 まとめ

すべての子が大切にされる授業を

2017年11月29日 寝屋川市立成美小学校 田鹿 大輔さん提案

田鹿さんは今回の研究会の案内に次のような言葉を書いています。—「説教では変わらんよ。子どもは授業で変わるんだ」大阪に来て、先輩の教師から言われた言葉です。何を言っているのか、さっぱりわかりませんでした。教師になって10年間、私はその言葉を目標に、やってきました。そして、実感できるようになりました。

①子どもが、生活を語る授業。②すべての子どもの学びを保障する授業。私は、この2つの授業をめざし、仲間とともに実践しています。教育には様々な課題がありますが、教師による授業が、それを引き起こしている大きな要因の1つだと思います。逆に言うと、授業には大きな可能性があると思うのです。—

記録ビデオを使いながら、具体的な子どもたちの姿を通して報告してくださいました。子どもたちが主体的に学び、仲間づくりに取り組む姿が伝わってきました。

松井直哉、山本卓雄、堀智晴、松森俊尚の4人のスタッフが、それぞれの感想を出すことで、まとめたいと思います。

◆松井直哉

寝屋川市立成美小学校の田鹿大輔氏からの報告は、授業風景のビデオを含め「授業」を大切にされたものでした。①すべての子に大事にされた感を育む。②すべての子どもの学びを保障する。③学びの作法を育てる。④深い学びで足腰の強い子を育てる。の4点が柱として提案されました。

ビデオを見つつ報告を聞き進めていると、子どもどうしの教え合いが実現されているのが氏の実践の大きな特徴だと感じました。子どもにとっては、友だちに「分からないから教えて。」と言うことすら大きなハードルだと思われるのですが、田鹿学級では、少人数のグループを越えて教室内でのいろいろな場所で教え合いが実現しています。しかも簡単に「分かった。」と言うのではなく、分かるまで何度も教え合う姿も見られました。これは子どもどうしがかなり信頼し合えて繋がり合っているからできていることではないでしょうか。

そんな風に授業での取り組みを大事にしている氏へ「授業以外の場面でのアプローチ」も質問として出ました。休み時間・終りの会（「お笑いの会」へと発展しているそうです）・つづり方、等でも田鹿氏は子どもを繋げることを意識した取り組みをしていることを紹介してくれました。

話題は「授業」から視野を広げて、「学校」「教育」へと移っていきました。

参加者の「授業」「学校」「教育」の捉え方や問題意識は更に深く論議すべき課題ではありますが、氏の実践がそれを考えるための入り口になり得る実践であることは間違いがないと思われます。

また氏の取り組みが勤務校の同僚からは高く評価されていないという謎と課題は残りました。

◆山本卓雄

田鹿さんに、映像（ビデオ）をまじえての授業実践、授業論を報告してもらいました。子どもの日々の学校の生活で、授業が8割、その他が2割、その8割の授業を大切にしていこうということでした。その時に大切にしたいキーワードが「大事にされ感」という言葉です。子どもどうしの人間関係作りを授業で作っていく、友だちにわからないと言えたり、教え合い、学び合う関係が生まれているようです。たしかに、授業で子ども達どうしに「大事にされ感」が育っています。そして、その前提にあるのは田鹿さんがクラスの子ども達一人ひとりに「大事にされ感」を持つ関わりをしていること

です。授業以外の取り組み（生活綴り方など）の報告にも強くあらわれていました。

大阪の解放教育が大切にしていた生活を見つめ、子どもたちをつなげる教育を日々の教科の授業で実践しています。授業だけを考えるのでもなく、授業を別にして子どもの生活を考えるのではなく、子どもの学び、成長を願う報告でした。次は、1時間の授業のビデオを流して、子ども一人ひとりの学び、学び合いをじっくりと見たいと思いました。

◆堀智晴

1、堀としては、まず、1時間の授業の記録をゆっくり見せていただけたらと思っていました。

今回は田鹿先生の授業論を展開され、それを説明するための場面の紹介でした。次回はゆっくり、一時間を見たいと思います。

2、報告では、田鹿先生の意欲的な教育実践の取り組みが伝わってきました。田鹿先生のような先生が少なくなったような気が堀はしているのでうれしかったです。

3、田鹿先生によると、学校には田鹿先生の実践に共鳴する先生がいないという現状報告でしたが、堀は共感している先生もいるのではないかと思います。

4、田鹿先生の教育論、授業論についてはもっと参加者で議論を深めたいと思いました。

5、松森さんの「教育限定論」についてももっと議論が必要だと思いました。1月の前川さんを交えての集会にも関係すると思いますが。

◆松森俊尚

「私は田鹿さんのように、そこまで授業を信じていないな」と思いました。教育、学校、授業というものに対して、私はどこかで不信感を持っているのです。理由のひとつは、生来の斜に構えて物事をみようとする性癖からくるもの。そしてもうひとつは、経験から実感すること。

そのことをもう少し詳しく話そうとしたのですが、返って混乱をもたらしてしまったようです。いまもうまく説明できる自信がないので、教育、学校、授業のことをもう一度考えるための二つのイメージを提案することにしたいと思います。

〈その1〉朝日新聞「折々のことば」から

学校制度はチャンスに平等にしたのではなく、チャンスの配分を独占してしまった（イヴァン・イリッチ）※懐かしい名前です（松森）

学校は、生まれ落ちた境遇とは無関係にすべての人に開かれたものとして設計されたはずなのに、人を「能力」という単一の物差しで測ることで、人を選別する装置と化した。学校が学びを独占し、地域社会の持つ教育の力は痩せ細っていった。メキシコを活動拠点としたオーストリアの思想家は、教育を消費サービスと考える趨勢に抗う。『脱学校の社会』から。

〈その2〉

難民キャンプができると、最初に生まれるのが「学校」だという話を聞いたことがある。私は直接調査したわけではないので、どのキャンプでもそうなのかどうかはわからない。しかし、イメージをすることはできる。

国連から支給されたテントの中で、あるいは大きく枝を張った大樹がつくる木陰の下に、子どもたちが集まってくる。その前に大人が立つ。「学校」が生まれる。

大人が口を開いて語り始める。「教える」ことがはじまる。おそらく、「教えるとは、希望を語ること」とルイ・アラゴンがうたうようにそこでは「希望」が語られるだろう。子どもの一人ひとりが、キャンプに行き着くまでの道のりや経験を語り始める。学習・学びがはじまる。

「だからどうなんだ」と問われれば、答えを用意できているわけではありません。私は、こういうところからもう一度、教育、学校、授業について考えたいと思っています。

“学びを広げるわたしと〇（まる）人の会”の課題にもできればと考えています。

